# しらかば

2023年度冬号　第63号



北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002　札幌市中央区北２条西７丁目一番地かでる２・７

電話 011-252-3411　FAX011-252-3412　URL: http://www.hokkaido-sien-center.jp/　E-mail: hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp


**中国・樺太帰国者文化祭**

## 日本の伝統芸能を体験

*「馬の群れが駆け抜けていくよう」体全体で感じる和太鼓の音*

和太鼓奏者荒川寿彦（二代目瀬川実厳）さん

10月31日東区民センターにて「中国・樺太帰国者文化祭」を開催しました。帰国者51名と地域住民18名のみなさんが参加し、和太鼓の演奏を鑑賞したほか、帰国者による歌や踊り、クイズなどのプログラムを通じて交流しました。

文化祭前半は、和太鼓奏者荒川寿彦（二代目瀬川実厳）さんのソロでの演奏や、お弟子さんと二人での演奏に耳を傾けました。帰国者のみなさんの多くが和太鼓の演奏を聴くのは初めてでしたが、手拍子を取りながら、体全体が包み込まれるような響きを楽しんでいました。ある帰国者は「広い草原を馬の群れが駆け抜けていくようだった」と表現していました。

希望者は実際に和太鼓の演奏を体験。帰国者にもわかりやすく、好きな食べ物などの言葉をリズミカルに口ずさみながら、楽しく叩くことができました。

絵手紙や歌の文化教室の活動の成果も発表されました。所長とのじゃんけん大会や、野菜や日用品の重さ当てクイズなどの楽しいプログラムもあり、見事に重さを当てた人にはその品物が賞品として贈られました。

**文化交流会**

# みんなで力を合わせたクッキーづくり

文化祭が行われた10月31日の午前中には東区民センターの実習室で「文化交流会」として、帰国者のみなさんと支援者のみなさんがお菓子作りに取り組みました。前回のビーフストロガノフのときと同様、樺太帰国者の菅原リュドミーラさんが講師となり、「絞り出しクッキー」を作りました。

クッキーの作り方は、室温に戻したバターに砂糖を加えて泡立て、卵白、小麦粉を加えて混ぜ合わせた生地を天板に絞り出して焼く、という比較的単純なものですが、バターがたっぷりの生地の扱いはなかなか難しく、グループのみなさんで力を合わせての作業となりました。焼きあがったクッキーは文化祭の参加者に配られました。

稚内・地域生活支援推進事業

# 新年交流会、久しぶりの開催

1月12日、稚内市にて日ロ経済交流協会と当センターの共催による新年交流会が開かれました。樺太帰国者、稚内市役所の職員やOB、帰国者が講師を務めるロシア語教室の生徒のみなさん25名が集まり、ゲームやダンスを通じて交流を楽しみました。稚内日ロ経済交流協会が中心となり、帰国者それぞれの分担を決め、普段お世話になっている支援者のみなさんをおもてなししました。

## *交流によって強まる地域のつながり*

昨年度はコロナ禍のため開催されませんでしたが、このような交流会は帰国者同士のつながりはもちろん、地域とのつながりを強める役割を担っています。稚内市役所からは社会福祉課、交流推進課の職員５名が参加しましたが、すでに帰国者のみなさんとは顔見知りで、よい関係が築かれています。近年、ウクライナから避難してきた帰国者の親族もいますが、稚内で無事に居場所を見つけることができました。交流推進課の事業として来年度計画されているロシア料理教室への協力を求められるなど、帰国者が地域の中で活躍する場も提供されました。

最後は参加者全員が輪になって踊り、交流会は締めくくられました。

# 大切にしたい「ご近所づきあい」

## *互いに支え合うことで築かれる関係*

「恋のバカンス」を披露した菅原さん（左）と吉川さん

帰国者のみなさんが孤立しないで地域とつながっていくための大事な要素の一つが、「ご近所づきあい」ではないでしょうか。

日本とは異なる文化的背景や言葉の問題のために近隣住人との間でトラブルが起こることもありますが、ご近所とよい関係を築くことに成功している例もあります。

１０月に開催された「中国・樺太帰国者文化祭」で樺太帰国者２世の菅原リュドミーラさんが日本人のお友達の吉川千恵子さんとともにステージに立ち、日本の歌を歌いました。二人は菅原さんの引っ越し先の団地で知り合いました。菅原さんがまだ新居に荷物も運びこまないうちから吉川さんは菅原さんに声をかけ、他の住人に紹介したり、団地の中でのルールを教えてくれたそうです。おかげで菅原さんは、安心して新しい生活をスタートさせることができました。

吉川さんは自治会の役員を務めており、様々なトラブルを未然に防ぎたいという思いもあって、菅原さんに声をかけたと言います。菅原さんが住むことになった棟は、それまで外国籍であったり、日本語が不自由な住人はいませんでしたが、他の棟では外国人の住人との間で騒音、ゴミ出しのルール違反、自治会費未納などの問題が起きていたことを吉川さんは耳にしていました。言葉の壁はありますが、菅原さんとはできるだけコミュニケーションをとって様々な情報を伝え、団地内での活動にも参加してほしいと思ったそうです。

菅原さんにとって、吉川さんのような人が引っ越し先にいたことはとても幸運なことですが、吉川さんを始めとする団地のみなさんは、互いに助け合うことの大切さを痛感しているだと言います。棟内には一人暮らしの高齢者も多く、普段から声をかけ合っていたおかげで、認知症などの異変にも気づき、対処できたことが数回あったそうです。菅原さんも、ストーブの取り付けなど事あるごとに助けてもらいながら生活していますが、一方的に助けてもらうばかりでなく、駐車場の雪かきを手伝ったり、折に触れては得意の料理を近所に振舞っています。

支えられる側であると同時に支える側でもあるということを皆が認識することで、よい関係が生まれています。

### 編集後記

ご近所づきあいに関して奇跡のような事例を紹介させていただきました。これほどの幸運にはなかなか恵まれないにしても、自分自身が常に誠実でいるということが大きな役割を果たすのではないか、と思います。

高齢化社会の中で、周囲とのつながりという問題は帰国者だけに限ったことではない、とつくづく感じます。